

珈琲

臺灣總督府殖生局

第一章 珈琲史

世界三大飲料たる珈琲、ココア及び茶の發見の動機、或はこれが傳播の沿革史の中、最もローマンスに富めるは、即ちこの珈琲なる可し。現代人の文化生活に、珈琲が如何にして必需品となるに至りしや、これを識るは誠に興味深き事なる可し。然れど世に初めて珈琲を飲料とせるは如何なる人物なるや、今猶ほこれが正確なる解答を與ふるものなく、傳説化せる諸説甚だ多し。かの十字軍遠征時代（西紀一九〇六—一二七〇年）には、未だ珈琲の使用は、歐州に知られざりき。然るに十七世紀に關して書かれし羅馬語の一論文により、次の如く説かれたり。西紀千四百四十年の頃伊太利人ファウスト・ナイロニ（Fausto Naroni）なるものが、亞弗利加アビシニアの南部丘陵地帯なるカツファ（Kafsa）にて牧畜業を営みし事あり。此の地方には珈琲の灌木甚だしく密に野生せり。牧舎の附近にはアビシニアの一寺院ありて、僧侶多く居住せり、僧侶達はやがてナイロニの飼育する家畜の群が、夜静かに安眠せずして、徹夜喧騒なるを發見し、不思議の感を抱くに至れり。彼等は竟に家畜が、何等か特殊興奮性ある雜草を秣する為ならんと想像するに至れり。而して家畜が秣する飼料を儉するに、牧舎附近に短葉及び小果實の散亂せるを見出し、これを鑑定せるに、豈計らんや、附近に野生せる珈琲樹なりしを識るに至れり。次いで僧侶達は其の果實に就き、興奮性の有無につき探りたり。これより後、僧侶達は夜半祈禱を行ふ際に、此の果實を煮沸せる飲料を喫し、睡氣を追拂ひたりと云ふ。かくしてこれが使用法は、漸次宣傳され、竟に一、二のアラビア商人の識る所となり、彼等隊商の努力により、其の地方の重要物産となるに至れりと云ふ。

（國立臺中圖書館・蔵『珈琲・臺灣總督府殖生局・昭和四年六月三十日發行』より抜粋）

【中文訳】

說到世界三大飲品 咖啡、可亞、茶 其為人所發現的契機、以及其流傳普及的歷史過程中、最富浪漫色彩的可說是咖啡了。咖啡是如何成為現代人生活當中不可或缺的必要品？這是個非常有趣的問題。世界上最早將咖啡當作飲品的人究竟是何等人物？答案眾說紛紜，迄今仍無定論。遠在歐洲十字軍東征時期（西元一〇九六—一二七〇年）當時咖啡仍未為歐洲人士所知。不過，在紀錄十七世紀的羅馬文獻當中，提到了以下一段記載。在西元一四四〇年時，義大利人法斯托·納羅尼（Fausto Naroni）在阿比希尼亞南部的丘陵地帶—卡法（Kafsa）經營畜牧業，此地生長著許多野生的咖啡樹。農舍附近的阿比希尼亞教堂住著一些僧侶，這些僧侶注意到納羅尼所飼養的牲畜，往往在夜深人靜時分仍不肯安眠、徹夜喧鬧不已，為此大感困惑不解。僧侶們懷疑這些牲畜是吃了某種令其興奮的野草所致，於是開始調查牲畜所食用的飼料。結果發現在農舍附近散落著一種葉短果小的植物，經過一番鑑定，意外地發現原來牲畜們就是吃了附近枝葉茂密的野生咖啡樹所致。接著，僧侶們又對咖啡樹的果實是否具有令人興奮的成分加以調查。僧侶們便嘗試在夜半進行祈禱時，飲下這種果實所煮成的飲料，發現竟然可以提神、驅除睡意。於是這種飲用法便慢慢地流傳開來，後來又為一些阿拉伯商人知道，經過阿拉伯商隊的努力推廣，終於讓它成為當地重要的物產。